

## 第一百五十一 夫婦の情

小山の妻君は未だ中川の説に服せず「爾う被仰ると人の妻はお化粧計りして居て良人を悦ばせるのが役目の様に聞えます子、娼妓や藝妓と擇ぶ所が無い様です子」中川「アハ、直ぐに爾う極端へ持ていらつしやるから困ります、今もお登和に言つて聞かせましたが物には程と加減があります、料理の極意は何であると云ふと味の加減と火の加減を覺えるのでせう、それと同様に妻が良人へ務めるのも程と加減が大切です、譬へば慍氣嫉妬は女の慎むべき處と云ふが良人の女道樂や酒道樂を餘所に見て知らん顔をして居るも妻の道でありません、諫むべき點は何處までも諫めなければならんが諫めると云ふ程を通り越して無闇に強い火で焼き付けると良人が遂に焦げて了ひます、西洋菓子の子ユ一なら浮上らないで縮まります、アハ、何事も研究すべきは只此の程と加減一つです」と自分にはよく解り居れども初めて聞きたる妻君は會得せず「ですけれども妻が良人に務めると云ふのが少し人情に乖く様です子、妻が良人を愛するのは自然の愛情で無ければなりません、即ち天真爛漫たる愛情で無ければ頼もしくないでせう」中川「その天真爛漫が禁物で、里つ子に遣つた子兒は實の親よりも里親を慕ます、あれが天真爛漫たる處で、實の親は敬愛すべきものと教へられて子供心にも其覺悟が出なければ親子の情は成立ちません、繼母が自分の生んだ子を可愛がつて先妻の子を憎がるのも天真爛漫たる愛情でせう、誰の子でも同じ様に愛育しなければならんと云ふ覺悟が出て初めて親子の愛情が成立つのです、夫婦の愛情も其通りで妻は良人に務める所があり良人は妻に務める所があつて始めて高尚なる人間性の情愛が出るのです、務めると云ふと態々餘計な事をする様ですが一旦覺悟を極めて高尚な愛情を出さうと心掛ければ段々習慣になつて務めるのが第二の天性の様になります、料理をしても最初は加減が六か敷いけれども上達すると自然に加減が解る様なものです、夫婦計りでありませんが、人として此世に立つ以上は人たるの務めを忘れてはなりません、殊に夫婦の仲は餘程務めても直きに我儘が出たがるものだから猶更注意するのが肝要です、近年に有名な英國の總理大臣チスレーの夫人は評

判の賢夫人で良人より先に伯爵の位を貰つた人ですが夫婦中の好かつた事夫婦の模範と云はれた位です、その夫人が或日良人と共に馬車へ乗つて議院へ赴かんとする時御者が戸を締める途端に夫人の指を戸の間へ挟んで夫人は怪我をしました、其時良人のチスレリーは議院で演説すべき複稿を考へて居た様子だから夫人は良人の心を亂すまいと思つて痛いのを耐えて何にも言はず馬車の戸に指を挟まれた儘議院へ行つて御者が戸を開いた時そつと指を抜いて夜になるまで良人に其事を知らせなかつたと云ひます、それ程迄良人に務める夫人が英國第一の賢夫人と云はれるので、もしや今の天真爛漫流に痛いとか怪我をしたとか、早く明けてお呉れよーなんぞと騒ぎ立てる様では妻たるの覺悟を失ふのです、と云つて全く天真爛漫の情を脱却して偽りの情を出せと云ふのはありませんがそこには程と加減があります、天真爛漫とは感情を其儘剥き出すので禮義作法も無ければ心の制裁も無い事になります、が人の妻は感情に任せて身にも心にも務める所が無く、良人も感情に任せて少しの事に癩癩を起して居る様では何んな仲の良い夫婦でも必ず衝突が起ります、戀愛で成立つた夫婦が末を遂げないのも天真爛漫たる感情任せが過ぎるからで正式に婚禮した夫婦は自ら心に覺悟が出るので長く持のです、何よりも早く分るのは小山君の主張なせる感情亡國論を考へて御覽なさい、一家の中にも感情で平和を破る事が澤山ありますよ」と此に至りて小山の妻君も亦た争ひ難し、

## 第一百五十二 今日姿

斯る間にお登和嬢は盛装して座敷に出で小山夫婦に向つて「大きに失禮致しました」と行儀正しく挨拶せり、その風采態度の閑雅にして優美なる、その顔の一目立ちて美しき、小山は暫く見惚れて妻を顧み「何うだ子お徳や、お登和さんの斯う云ふ姿を見てもまだ天真爛漫説を唱へるか子、人の良人たる者は妻の取亂した姿を悦ぶだらうか、嗜みのある姿を悦ぶだらうか」妻君「モ一分りましたよ」小山「アハ、一言もあるまい、然し斯う云ふお登和さんの姿を大原君に見せたら何と思ふだらう、速く見せ度いな、大原君はまだ來ないか知らん、お徳やモ一時間になるからと云つて大原君を呼んでおいでよ」と直ぐ隣り

なる大原家へ迎ひに遣りぬ、程無く大原は小山の妻君に誘はれて來れり、妻君、大原家の有様を報告し「中川さん、大原さんがお出かけにならうとするとお代さんが頻に引き留めて何時に歸るとか外へ寄つては不可とかそれは／＼しちくどい御託宣で大原さんも大閉口でした、オホ、あれが所謂のお代さんの天真爛漫たる處でせう、その代り大原さん、お登和さんの今日の姿を見て壽命をお延ばしなさい、私達まで氣が晴れる様です」と態とお登和嬢の前に押し遣る、お登和嬢羞かしそうに次の間へ退く、大原は脇目も振らずして嬢の風采を眺め「實に美た子、今日は一層の美を増した、之を思ふと愈よ僕には過ぎものだ、斯る美人を僕の爲めに空しく閑却しては愈よ以つてお氣の毒に堪えん」と却て自ら抑損するに小山が失望し「爾う云はれては張合が無い、君が中川君に言出した事は僕も聞いて居るが自分から爾んなに引下らんでも宜いではないか」大原「イヤ僕は引き下らんでもお登和さんの今日の姿は遙に僕より引上つて居る、然かるべき華族の奥方にしても決して愧かしくない、僕等風情とは愈よ距離が遠くなつた子」と是れは亦た献身的の情愛、中川も心に戻かしき所あり「大原君、君の心も幾分か程を過ぎて居るよ、誠の心に違い無いけれども少しは自分の事も考へなければならん、イヤ考へて貰ひ度いのだ」大原「それは考へ居るさ、よく／＼考へて見ると世間の男兒は自分に澤山の缺點がありながら完全無缺な妻を得度がる、百點を滿點として自分の資格は五十點か六十點より無いのに百點の婦人を妻に得んとして居る、それは實に出來ない相談だ、僕と雖も一時はその過ちに陥つたけれども段々深く周圍の事情を考へて見ると僕とお登和さんとは四五十點の差がある、と云つて家のお代先生は僕の點より少し低い様だけれどもその差たるや僕とお登和さんの差程ではあるまい、僕の本分として其差が寡い方へ傾かねばならん、殊に今のお登和さんのお姿を拝み奉ればだ、天界の漁夫と天人程差ふ子、僕はモ一心を決して居るよ、願くは天お登和さんに幸福を授けて玉の如き良人を得せしめ給へだ、ア、如何にも美しい、僕は此姿を見た計りでも冥加に餘る子」と是れも亦た覺悟の固き人物なり、お登和嬢は次の間へ隠れて出で來らず、中川は下女に命じて腕車を呼ばしめたり、車來りぬ、小山の妻君お登和嬢を誘はんと次の間へ入り「アラお登和さん、眼の際を少しお直しなさいよ」

## 第五百五十三 子爵の家

中川兄弟小山夫婦及び大原滿の五人は車を列ねて廣海子爵の邸に赴けり、邸は山の手の谷間にて極く閑雅なる處に在り、昔し風の冠木門に黒塀を繞して外見の仰々しからざるは主人公の嗜みと察せらる、門を入れば前庭の松を透かして玄關見ゆ、忌味氣の無き純粹の日本造り、屋根も柱も新しく清らけきは建築してよりまだ數年を出でざるべし、車は停まりぬ、五人は玄關に立ちて案内を乞へり、取次に出でたるは十三四計りなる男の子の黒木綿の紋付に小倉の袴を穿きたるが行儀正しく式臺へ兩手を突き、「誰殿様で被在いますか」と慇懃に名前を聞き取て奥へ取次に行きぬ、其の舉動の奥床かしさ、餘程物馴れたる給仕にやあらむ、良ありて自から立ち出でたる玉江嬢、今日は高島田に裾模様、客受けの禮にとて姫君らしく盛装してありけるが滿面に愛嬌を湛え、「是れは先生、皆様もお揃ひで、よくお早くお入來遊ばしました」と自ら案内して奥に誘つ、通されたるは廣やかなる客座敷、座蒲團並び煙草盆出で、疾くより客を待受顔、床に掛けたるは古人の名畫、前には花菖蒲が姿好く生けられたり、縁の障子は左右に寄せられて庭の泉水向ふの築山坐ながらにして幽邃の景を眺むべく木々の梢に青葉繁りて涼しき風のそよ／＼と座敷へ吹き來る、五人の客は此中に在りて自から心澄み氣の寬なるを覺えぬ、良ありて立出でたる主人公の廣海子爵、歳は五十に餘つらん、髪は半ば白けれども髭の黒々として顔に犯すべからざる威嚴あるは當年の意氣未だ全く消えぬと身ゆ、眉宇快濶にして音聲甚だ高けれども更に傲然たる態度無く、丁寧に一々來客に會釋なし、「能くこそ今日はお入來下された、實は以前から一度御招待申上度いと思て居ましたが娘の稽古が未熟の為め急には御招待の材料が出來ん様な譯でアハ、」と飾り無き温情は宛ら人を包む様に覺ゆ、是も多年政界に在りて人に對する動作に慣れたるならむ、此方の客は書生上りの若紳士、意氣こそ高くして天を凌げども未だ斯る場合の應對に馴れず、何となく身の小さくなる様に覺えて迂濶には口を利かず、婦人達は猶更沈黙なり、人衆けれども席淋し、主人公の廣海子爵客人の氣を引立てんとて快活らしく、「時に皆さん、失禮ですが此の家屋と庭とを見て下さい、是れは三年前に我輩が自ら設計して建たので、少々

は凝つて居る積りです、我輩は半分西洋風半分日本風と云ふ様な雑種家屋が嫌ひで西洋風なら残らず西洋風、日本風ならば純粹の日本風と云ふ主義ですから此の家は日本風に造つたのです、中川さん、貴君は何事にも深遠高尚な御意見があつて家庭料理に生理上や衛生上の原則をお説きなさる事は娘から毎度聞いて居ります、我輩もそれによつて往々發明する事もありました、貴君の眼から一つ此の建築を腹藏無く評して下さい、必ず我輩も會得する所があらうと思ひます、失敬ですがその床柱などは滅多に得難い黒檀の太木でそれを有名な彫刻師に刻らせましたから先づ此の家の寶と云て宜い、向ふには茶室も出來て居ます、我輩が御案内しますから一つ家の内を見て下さらんか」と主人は平生家自慢、客のある事に家の内を示して褒めらるゝのが何よりの樂みと見ゆ、

## 第一百五十四 家自慢

娘の玉江嬢は父の側に在り「阿父様、中川さんに見て戴きますと中々外のお方の様に追従らしいお世辭を被仰いませんよ、その代り成程と感心遊ばす事が澤山御座いませう」子爵「それが此方の望だ、中川さん一つ貴君の腹藏無い評言を伺ひ度いものですから何卒一つ御覽下さい」と自ら立て案内せんとす、此に於て中川も得意の長廣舌を揮ふべき機會を得たり「御主人暫くお待ち下さい、腹藏無く評して呉れると被仰れば私も其積りで拝見致しますが、私は平生風流亡國論を主張する人物、人の住宅を觀る時には神殿や佛寺を觀るのと違つて風流の眼からは拝見しません、即ち實用の眼から拝見します、就て第一に御當家の中心點から見せて戴き度いもので」と壁頭第一に風變りな注文、子爵は俄に悟り得ず「中心點とは何處の事です」中川「人の住宅の中心點は即ち臺所で、家族一同が毎日三度の食事も臺所で出來る、來客への御馳走も臺所で出來る、家の人の健康も不健康も病氣も衛生も何でも大概臺所で支配されますから全家屋の中心點家庭の本能力は臺所に在りませう、左れば家屋の中で一番大切な臺所から拝見致し度う御座る」と思ひ掛け無き注文に子爵は苦笑ひして躊躇の氣味「何うも家の臺所は狭くつて不潔ですから子、それに今日は取散らしてあります」

中川「その取散らした處が拝見し度いので、即ち活動して居る臺所の方が拝見するに面白いので」と斯く言出しては容易に引込みさうも無し、玉江嬢は父の袖を惹き「だから阿父様、今日は迂つかり御自慢が出来ませんと申上げましたのに」子爵も亦た敵兵に背面攻撃を受けた心地「それならば不潔ですけれどもちよいと臺所を見て下さい、それから茶室へ御案内申ませう」と澁々ながら路を轉じて臺所へ案内する、臺所の下女達はよもお客様が此まで侵入せまじと思ひ居たるに今迄滅多に足さへ入れぬ主人公が先立ちにてドヤ／＼客人の入り来りければ呆氣に取られて茫然として居る、中川は先づ戸口に立て臺所の全景を眺め「成程御主人のお言葉の通り、此家屋全體に比例しては大層臺所がお狭い様です、嘸皆さんがお仕事をなさるに御不便でせう、先程拝見した黒檀の床柱は何れ千圓以上も致しまうが來客の眼を悦ばすだけでお家の人の役に立ちません、その千圓を臺所の方へお費ひなすつたら嘸お手廣に出來たでせうに」と斯る人に評されては床柱も失禮ながら大層お臺所が闊い様で、晴れた日でさへ闊い程ですから雨の降る日は戸棚の物がよく見えますまい、臺所は食物を調理する場所でも不潔を忌むのですから家の内で一番明るい處にしなければなりません、天保時代の昔しならイザ知らず、今は硝子と云ふ便利なものがあつて、既にお座敷の障子には腰硝子が箆めてありました、お座敷の障子へ腰硝子を箆めるよりも臺所の天井へ硝子の明り取りをお拵へなすつた方が宜いでせう、其上お座敷と違つて大層周圍が黒く燻ぶつて居るではありませんか」玉江嬢父に代り「是れは竈の煙が内へ廻りますので」中川「成程、煙突をお使ひにならんですな、引窓やランマは天保時代の遺物、雨の降る日は役に立ちません、折角の御普請も煙で燻らせるのは惜しい様に思います」と何處までも觀察點が風變り、主人公も今は自慢どころに非ず、

## 第一百五十五 臺所の仕事

去りながら深く中川の言葉を味ひなば大に悟る處無きにあらず、主人公の廣海子爵も胸中の懊惱を忍び「中川さん、成程貴君の御觀察は一種風變りで面白い、今迄一度も爾う云ふ方面から批判せられた事はありません、後學の爲めに今日はドシ／＼臺所の缺點を指摘して下さい、

我輩も娘に家庭料理を習はせてから大層食物上の趣味を覚えましたが、其序に貴君から委しく臺所の學問を教はりませう」と今は心に決する所あり、中川は最も得意の講釋「イヤお教へ申す力はありませんが私は常に生活問題を人の一番大切な事と存じます、生活問題が大切ならば家の内では生活の根源たる臺所が大切なので臺所の事が整ふのと整はないとは一家の盛衰に關係しませう、若しも私に腹藏無く批評せしめれば此方のお臺所は此の家屋に不釣合だと申さなければなりません、お家の人が滅多に使はない客座敷には、二千圓も三千圓も金が掛つて居て御家族一同が生活の根源たるお臺所には恐らく其の十分の一の費用もかけて無いと思はれます、序にちよいとお戸棚の中を拝見致しませう、オヤノ、玉江さん、奥の方へお醤油が何かこぼれて板敷へ流れて居ます、大層お戸棚の隅へは塵が積つて居りますがお臺所のお戸棚は毎日お掃除をなさいますか」玉江嬢「イ、工滅多に掃除は致しません」中川「ヤレノ、お座敷に出て居た煙草盆やお火鉢は大層綺麗に拭込んでありますが」玉江「ハイ、あれは毎日光澤布巾をかけますから」中川「食物を納れて置く戸棚は毎日掃除せずして稀に客へ出す煙草盆と火鉢を毎日磨くとはチト其意を得ない様です、見れば戸棚の天井に蜘蛛の巣が網を張つて油虫の死骸が蜘蛛の糸で釣下げられて居ますがもしやあの糸が切れたら食物の中へ落る事はありますまいか」玉江嬢初めて氣が付き「アラ三や、なぜ蜘蛛の巣を拂つて置かないだらう」中川「アハ、斯う云ふ皮肉な攻撃を受けては溜まりません子、然し明治時代の食物を天保時代の臺所で作ると云ふのは少々無理です、衛生とか生理とか云ふ事を土臺にして家庭の食物を料理なさるのに不衛生な戸棚や不健康な臺所は少し適當しません、オヤノ、此に鼠色の布巾が掛けてあります、此方では最初から鼠色の木綿を布巾にお使ひなさいますか」玉江嬢「アラ爾うでは御座いません、最初は白い晒木綿ですが段々と斯う云ふ色になりましたので」中川「よくお氣味が悪いとお思ひになりません子、白い皿を濯つて鼠色の布巾でお拭きになつたらば却て皿が汚れは致しませんか、濯つたものを拭く布巾ですから濯つたものよりも一層清潔なもので無ければなりません、最初から布巾を毎日石鹼で煮出して置くと地が切れても色は變りませんけれども一日でも布巾を煮出しませんと直ぐ鼠色になります、西洋では大概一日使ふと直ぐ西洋洗濯へ遣つて毎日洗ひ立てのを使はせるそう

です、それに器物を濡れた布巾で拭くと再び汚れますから乾いた布巾で拭かなければ清潔になりません」玉江嬢「爾うしますと大層布巾が澤山要りますネ」中川「勿論の事です」と飛んだ場合に臺所の講釋、